

2020年8月2日 礼拝説教要旨

詩編講解説教25 「選ぶべき道」

詩編25：12～14、ヘブライ11：8～10

詩編第25編は表題のところに「アルファベットによる詩」とありますが、これは各節の冒頭の言葉の頭文字がヘブライ語のアルファベットの順番になっているからです。これは単に言葉遊びというよりも、教育的な意味合いが強いられます。つまりアルファベットの順番になっていることで詩を暗唱しやすいのです。なぜ暗唱するのか。それは体得するためです。頭で憶えるというよりは体に染み込ませるためです。それによって御言葉が単なる知識ではなく、その人のものになります。例えば子どもが夏休みの宿題で算数や漢字のドリルをするようなものです。それは繰り返し書くことで体得するのです。わたしは信仰というのはそういうものだと思います。日曜日の礼拝もある意味繰り返しです。説教も何か目新しいことを語っているわけではなく、キリストの福音を繰り返し聴き、繰り返し聖餐にあずかる。そのようにして頭で、知識として知っているというよりは、体で憶える。心で憶える。そのようにして救いはその人のものになる。信仰とはそういう体験なのです。

井上洋治というカトリック教会の司祭がおりました。彼が書いた『余白の旅』という本があります。自叙伝ですが、そこにご自身が洗礼を受けた時のことが書いてあります。この人は戦後すぐ真理を探究して東大の哲学科で学び、また大学の聖書研究会やキリスト教入門講座なども入ったけれども、いまいち納得できない。キリスト教はどうも肌に合わないと言え始める。そのような時にある修道女の本を読んで、それが背中を押した。その修道女はテレジアと言って小学校しか出ておらず、15歳で修道院に入り24歳でなくなった人でした。その彼女の遺した素直な信仰の証しが彼の受洗のきっかけになりました。彼はこう書いています。「もし彼女になまじの伝統的なカトリック神学の知識があったとしたら、おそらく素直に、無条件の信頼と無我に通じる『幼子の道』が神の悲愛を受け入れるための全てであることを歌い上げることはできなかった」と。そしてこう書きます。「結局はテレジアにつかまったということなのだろう。受洗した直後から、パッと土管の向こうに今まで見たこともないような青空が開けていたというのにも似た、自由と喜びを味わうことができた。それはどこまでも続く白い一筋の道を見出したのにも似た喜びだった」と。彼は自分がなぜ洗礼を受けたのかよくわからないと言います。でも何か大きな力が魂に働きかけたと言いたいようがない。どんなに哲学を学び、神学を学んでも手応えがなかった。しかし無学の一人の修道女の証しが彼をつかまえた。でも信仰というのはそういうものだと思います。決して知識ではないのです。体験なのです。

12～14節に「選ぶべき道」また「契約の奥義」とあります。これは救いに至る道であり、救いの契約のことです。そこに至る道をはっきりと示してくださいと詩人は願っています。そこで注目していただきたいのは、今日のところで、救いの道、救いの契約を示されるのは、「主を畏れる人」だと言います。畏れるというのは怖がることではありません。それは神さまへの信頼です。今日はヘブライ人への手紙を読みました。ここにアブラハムのことが出てまいります。アブラハムは何より神さまを畏れる人でした。そのことがもっともよく表された出来事が創世記にあるイサク奉獻の話です。一人息子イサクを捧げよという神さまの言葉に従って、まさにイサクに手をかけようとしたその時に神さまが言われます。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが今分かったからだ」(22：12)

神さまを畏れるというのは、神さまに最善のことがあると信じて、御言葉にどこまでも従うことです。アブラハムがイサクを捧げようとしたのも、神さまの御心が最善と信じたからです。神さまに全てがある。神さまに従えば間違いない。だからアブラハムは自分の一人息子を捧げようとした。そのようにして自分を空っぽにして神さまを全てにする。それが畏れるということです。それは先ほどの井上洋治の「無条件の信頼と無我に通じる幼子の道で神様の愛を受け入れたテレジア」に通じるものがあります。アブラハムが行き先も知らずに約束の地に旅立ったのも、それは自分ではなく神さまの言葉を全てにしていたからです。知識があったなら、それが邪魔をして神さまを無条件に信頼できなかつたでしょう。このアブラハムに神さまは言われます。「地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである」(創世記22：18) 神さまに全てがあると信じて、その御言葉に聞き従うこと。その人に神さまは選ぶべき道を示されます。

しかしわたしたちにはその畏れがありません。神さまを全てにできない。そこにはいつも自分が入り込む。自分の知識だったり、行いだったり、それが救いを可能にすると考え。だからわたしたちに本来救いの道は示されないし、契約の奥義も本当なら悟らせてはくださらないのです。ではそのわたしたちがどうして救われるのか。それはイエス・キリストによるのです。イエス・キリストがまさにわたしたちに代わって、無条件の信頼と幼子の心で神さまの御心を表された。キリストの無条件の信頼がご自身を十字架で献げてしまわれることを可能にしました。このキリストがわたしたちの唯一の救いの道であり、真理となり、命なのです。

昔から教会では信仰を求めることを道と書いて「求道」と言いました。求道とは、自分でその道を求め極めることではなく、いかに「無条件の信頼、幼子の心」で神さまの恵みであるキリストを受け入れるかということです。選ぶべき道はキリストです。自分の知識ではない。行動でもない。自分を空っぽにしてキリストをすべてとする時にその人は恵みに満たされて主のもとに宿ることができる。そういう救いの奥義にわたしたちは招かれているのです。

天の父よ。なかなか自分を空っぽにすることができません。自分の知識で、経験で救いに到達しようとしています。余計なものを削ぎ落とし、ただキリストのみを救いの道として歩ませてください。そこにこそ恵みが満たされることをどうぞ悟らせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。